

ドラゴンボールZ+

謎の菓子X

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

魔人ブウを倒した孫悟空たちによる摩訶不思議アドベンチャー。  
更なる強敵を迎え撃つ悟空たちの新しい冒険が始まる。

注：この小説は『ドラゴンボール超』の世界線とは全く異なるストーリーです。

# 目次

帝王の弟・フリジット編

プロローグ

1話 「サイヤ人復讐計画 弟の野望」

2話 「願い玉を求めて 新・帝王の悲願」

3話 「帝王の誤算 大きな傷痕」

1

7

14

17

## 帝王の弟・フリジット編 プロローグ

フリーザによって、惑星ベジータが消滅したエイジ737。生き残ったサイヤ人はベジータ、ナツパ、ラディッツ、そしてカカロットの4人に絞られた。しかし、惑星ベジータが消滅する前、サイヤ人達を従えていた帝王・フリーザの影に隠れて過ごしていた弟がいた…

「コルド大王… 次世代の後継者をそろそろお決めになられてはいかがですか？」

「無論だ。だが私の後を継げるのはフリーザしかいまい… フリジットは、とても戦闘では使えない。」

フリーザの父親のコルド大王は、自身の『悪の帝王』の後継者として、フリーザを指名した。それに伴い、もう1つ残酷な処分が下された。

「パパ、なんで僕はパパ達と一緒に行動できないの!?フリーザとは一緒に行動してるのに！」

「フリジット、貴様のような臆病な息子など一族の恥だ。どこかそこから辺の惑星で勝手に暮らすがいい…」

コルド大王には、もう1人の子供がいた。フリーザの弟にあたる、フリジットだ。

コルド大王の後継者は、兄・フリーザとなった。弟・フリジットは、生まれつきながら低い潜在能力と戦闘能力を評価されず、コルド大王に捨てられた。

「ひぐっ… えぐっ…」

幼いフリジットは、心に深い傷を抉られた。フリジットは、兵士たちの指示により宇宙船に乗り、惑星ベジータへと向かわされた。

「ちっ… フリーザの野郎… 俺たちを奴隷か何かと勘違いしてやがる…」

「全くだ、フリーザめ… いつかサイヤ人達の力で、奴を倒そうぜー」  
「じよ、冗談抜かすな！フリーザ様の戦闘力は、サイヤ人達力など遥

かに超越してるんだぞ!？」

惑星ベジータでは、サイヤ人達が穏やかに暮らしていたが、その裏でフリーザ一族に対する憎しみを抱いているサイヤ人も多かった。

バタツ

「ひえっ…。」

「ああ？なんだこのガキ！」

「おいおいこいつ、フリーザの弟だぜー！」

「確か、弟の方は戦闘センスがあまりにも低いために、惑星ベジータに送り込まれたとか…。」

フリーザ軍は、戦闘能力の低いフリジットを戦闘民族であるサイヤ人達と共同生活を営ませることで、立派なフリーザ軍としての力を習得させようという狙いだったようだが…。

バシツ バンツ

「いたっ、やめっ…。」

「丁度いい、フリーザの野郎に顔も似てるし、サンドバッグにしてやるうか!？」

「坊や、キツイお仕置きの時間だよ…!？」

フリーザに似ている容姿からサイヤ人達の目に留まり、フリーザに好意を抱かないサイヤ人から、かなりの虐待を受けていた。日に日に体は弱まり、虐待はエスカレートしていくばかりだった。暫くして、フリジットは惑星フリーザへの帰還、そしてフリーザ軍への加入を願った。

「フリーザ… 僕はあんな星は懲り懲りだ！いつもいつも理由をつけて虐められるんだ… いい加減フリーザ軍に入れてくれよ!？」

「それは、君が弱いからじゃないの？フリジット?？」

「なっ…。」

「元より、落ちこぼれの君になんか何一つ期待してないんだよ!？」

ピピッ

フリーザの一撃により、フリジットは完全に捨てられた。宇宙空間を彷徨い続け、遙か彼方『惑星プルーン』に辿り着いた後、フリーザやサイヤ人に復讐する為に、1人で猛特訓を続けた。

「これじゃ、フリーザ達には勝てっこない…。」

だが、フリジットは端から戦闘能力が皆無な為、まともな特訓方法を見出すことができないのも当然だった。

「おっ、なんだあ？困りごとか？お坊ちゃん」

すると、ガタイの強そうな巨大な男がフリジットに声をかけた。

「フリーザとサイヤ人つてのに復讐したいんだ… 僕は奴らに複数人で虐められたんだ…。」

「なっ、フリーザ!?あの宇宙の帝王か… もしかしてお前は…。」

「僕はフリジット、フリーザの弟なんだ…。」

驚愕の事実を知ったその男は、例え悪の帝王の弟であろうと、酷い待遇を受けてきたフリジットにチャンスを与えたい気持ちだった。しかし…。

「なるほどな… 生憎だが、サイヤ人達程度ならなんとかなれども、フリーザを相手にするには俺は愚か、この星の民族にはとても無理だ…。」

当時、フリーザの力は宇宙中でもトップクラスであり、相手にするのはとても不可能だとされてきたのだ。

「だがな、この星はフリーザに目をつけられることもなく平穏だ。それに、フリーザには及ばずとも、強靱な力を持った連中ばかりだ。」

「だったら、僕に稽古をつけて欲しい！フリーザとサイヤ人にどうしてもこの手で復讐がしたいんだ…！」

「本当なら金銭を要求するところだが、お前の今までの待遇を考慮してそこら辺は全部パーにしてやる。」

「ありがとう… 本当にありがとう！」

「俺の名はカイスだ… よろしくな…。」

こうして、暫くの間はフリジットと惑星プルーンの巨漢、カイス一味との特訓で汗を流した。

ある時は…

「随分マシになってきたな、その調子だ！」

「今日はありがとう！モモ兄さん！」

またある時は…

「スピードは確かに良いんだけど、力強さが足りないね…。もっと相手を押し倒すような力が…」

「ビワ、それお前が言えたことじゃないけどな。」

「ハツハツハツハ」

フリジットは、カイスの仲間である『モモ』『ビワ』とも共同生活をしていた。

カイス一味との猛特訓で鋼の体を手に入れたフリジット。だが、そんな生活をしている中で、復讐心も徐々に削がれていた。しかし…

ビツ

ピピツ ピピツ ピピツ

「ふ、フリーザだああああああ」

「フリーザ達が攻めてきた!!!」

「ぎ、サイヤ人もいる…。！」

強大なパワーを醸し出していた惑星プルーンの民族の力を感じ取ったフリーザ軍の侵攻が始まったのだ。

「てめえら！フリーザ様は貴様たちの存在を否定なされた！大人しくここで墓場に失せるんだな！」

ピュン

「うわああああああああああああああああああああああ」

惑星プルーンは、あつという間に占領されかかっていた。だが、まだフリジットやカイス一味の存在は、気づかれていなかった。

「フリーザの野郎…。サイヤ人達を連れて…。もう許せない！」

「待て！フリジット！いくらお前が修行して強くなったと言っても、フリーザの相手にはならない！」

「でも！俺は！」

カイス一味との特訓で成長したフリジットでも、フリーザには敵わないと指摘されたのだ。フリジットの頭は、完全にフリーズした。

「これもやむなした。フリジット！ここにお前が乗ってきた1人用のPODがある！お前だけでも別の星に逃げるんだ！」

「でも！そんなことしたらカイス達が…」

「平気だよフリジット…。自分の星の事は、自分達でなんとかするか

ら…。」

「そんな…。」

「いつかお前がもつと強くなって、私達の仇を討ってくれ…。」  
「…。」

フリジットは、受け入れられなかった…。自分を救い、成長させてくれた3人を見捨てて逃げてしまうという事実を。

「安心しろ、俺たちはあんな奴らには負けはしねえ！力ではともかく…。俺たち惑星プルーン人の誇りだけは絶対に捨てない！」

ゲオオオオオオオオオオオオ

「みんな…ごめん、死なないで…！」

フリジットは、3人の姿を眺めながら、惑星プルーンをPODで飛び去った。

その後、惑星プルーンの民族はフリーザ達により全滅させられた。フリジットは暫くの間、無人の小惑星でただ途方に暮れていた。

「俺が…。全て…。」

フリジットは、その後数年間食料の確保以外の作業を全くしていなかった。そんなある日のことだった…。

ゲオオオオオオオオオオオオ

「ぬお!?何だ!?!」

1つの宇宙船が飛んできた。しかし、どこかフリジットにとって見覚えのあるような物だった。

シュー

「よつと、ここにフリジットが…。」

「か、カイス！なんで!?!」

全滅したはずの惑星プルーンの巨漢、カイスがフリジットの元へやってきた。

「フリーザ達によつて、惑星プルーンを滅ぼされる前に俺たちも脱出を試みたんだが、緊急脱出用の宇宙船は1つしかなかったんだ…。」

「じゃあ、モモ兄さんとビワ姉さんは…。」

「亡くなった…。生き残ったのは俺とお前だけだ。」

だがフリジットは、涙を呑んで事の終末を受け入れた。



「俺にも、フリーザやサイヤ人達に復讐する理由が出来た。奴らがフリーザ軍なら、我らはフリジット軍で対抗するぞ！」

カイスは、フリジットにゲキを入れた。フリジットにも気合いが入った。

「絶対に、仇を討つんだ…！」

こうして、フリジットとカイスは近くの星の有力な戦士達をスカウトし、フリーザ軍に対抗する為のフリジット軍を形成していた。

修行も怠る事なく、毎日出来る限りの事をし続けた。しかし、数十年後…フリーザは死んだ。そんなフリーザを倒したのは、サイヤ人だったのだ。

「孫…悟空…？」

「どうやら、奴ら生き残りのサイヤ人は地球に生息しているようだな。」

「フリーザがいなくなった今、俺が復讐を果たすべき相手は、サイヤ人だけだ。例え命に変えてでも…！」

フリジットは、サイヤ人達への復讐を誓った。

## 1話 「サイヤ人復讐計画 弟の野望」

魔人ブウを倒してから1年半、地球には再び長い平和が訪れていた。しかし、ブウとの戦いの最中には既に悪の手が忍んでいたことを、知る者はいなかった。

エイジ775の夏頃、オレンジスターハイスクールに通う孫悟空の息子孫悟飯は、夏休みに入っていた。その間、父親の孫悟空と時間を共にすることも多かった。

「父さん、一緒に釣りに行くなんて久しぶりじゃないですか?」

「そうだな、セルゲームの前に釣りしたのは覚えてっけど、その後すぐオラが死んじまったかな。」

「悟天はお父さんと釣りをするの、初めてじゃないか?」

「うん、今までは兄ちゃんと2人で釣りするだけだったし、お父さんもいるとやっぱり楽しいや!」

「そいつはよかった、ようし悟飯!悟天!沢山釣って帰って、母さんにご馳走してもらおうぞ!」

「はい!」

彼らは平和なひと時を満遍なく楽しんだ。その一方で、平和に浮かずに鍛錬を続ける1人のサイヤ人の姿も見えた。

「たあっ!はあっ!」

シュツ シュツ

300倍の重力室で修行をしているサイヤ人の王子・ベジータ。ここ最近はこの重力室に引きこもり修行を続けている。

「これではカカロットの領域に踏み込むことができません!!!」

バン

あれ以来ベジータは、孫悟空が持つ変身形態『超サイヤ人3』の習得を目指し、修行を続けていた。

「ベジータ!いい加減に出てきなさいよ!あんた何日そこに引きこもってるの!」

「うるさい!今この時期が1番肝心なんだ!邪魔するんじゃない!」

ベジータの妻・ブルマは、戦闘バカのベジータにかなり世話を焼い

ている。しかし、そんな戦闘バカのサイヤ人でも頑なに引きこもるわけではない。

「あっそ！せっかく今日はバーベキューしようと思ったのに。」

「…バーベキューだと…!?」

「気になるでしょお？だったら、シャワー浴びて着替えて待つてなさい！」

「チツ…」

誇り高きベジータも、食には抗えない。

生き残ったサイヤ人は平和を満喫していた。

——正午

ランチタイムの時間。多くの人々の飲食店内への移動が盛んなこの時間帯、都中に大きな影が降り立った。地鳴らしが響き渡り、人々が何事かと周囲を窺った。そこで人々が目にしたのは宇宙船の姿だった。

「う、宇宙船だあああああ！」

「パパー！宇宙船だよあれ！」

ザワザワ… ザワザワ…

人々が動揺をする中、宇宙船の中部にあるシエルターが開いた。中から出てきたのは1人の宇宙人だった。

「どうやら、ここが地球のようだな。」

（驚いた… サイヤ人が生息しながら、この星の者達は平和に暮らしている。一体サイヤ人達はこの星の何に絆されたのだ…？）

人々がその姿に驚く中。彼はこう告げた。

「我が名はフリジット。サイヤ人に復讐を果たし、この宇宙の征服を果たすのだ!!!」

ブウウウウウウウウウン

フリジットはそう言い放つと浮かび上がり、巨大なパワーボールを都のど真ん中に向けて打ち放った。

カツ

「うわああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

「ぎゃあああああああああああああああああああああ  
あ!!!」

フリジットの一撃により、華やかだった都の周辺は瞬く間に荒廃した。そんな騒動をいち早く目の当たりにしたのは、孫悟空だった。

「貴様…!!!」

悟空はフリジットがパワーボールを放つ前に巨大な気を薄々と感じ取り、その都に移動したが、手遅れだったのだ。

「早速獲物が1匹、かかったな…。」

「!」

悟空はフリジットの姿がフリーザの姿に酷似していることに気づいた。

「ふ、フリーザ!!!」

「間違いない、奴が孫悟空だ…。」

辺り一面静寂に包まれる中、激しく睨み合う孫悟空とフリジット。  
(殺気を感じねえ… 奴はオラのことを知ってるようだが…)

『悟空よ…』

北の界王が悟空に呼びかけた。界王は、この騒動についてやフリジットの目的をキャッチしていた。

『奴はフリーザの弟だ。生き残ったサイヤ人達が地球にいることを知ったことから復讐を果たしにきたようだ…』

「復讐…？ 貴様、フリーザの仇を討ちに来たのか!？」

フリジットはその言葉を聞くなり、ニヤリと笑みを浮かべ、嘲笑い始めた。

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハ！フリーザの仇討ちだと？ くだらん  
な。むしろ、憎きフリーザを葬り去った孫悟空… 貴様には感謝しているほどだ。」

「なっ!？」

界王からフリーザの弟だという事実を聞いていたこともあり、フリジットのフリーザへの厭忌心に驚いた。

「おめえ、一体何が目的だ!」

「貴様たちサイヤ人への復讐だ。一族の仇討ちなどという綺麗事のた

めではない…！俺自身のためだ…！」

しかし、彼から殺気を感じない悟空は、真の目的を掴めないままだった。

「おめえの目的がなんなのか、オラ知ったこつちやねえけどな…この地球をぶつ壊そうってんなら、容赦はしねえぞ！」

ゴゴゴゴゴ…

悟空が戦闘態勢に入った。合わせるようにフリジットもパワーを上げていく。

「どうありやあああああああ！」

バシユン ドン！

悟空の猛攻も、フリジットに軽くあしらわれる。悟空はなんとか立て直すが…

「喰らえ！」

ズオツ…

フリジットはターゲットを悟空ではなく別の小さな都に切り替え、特大の一撃でその地域を壊滅させた。悟空の怒りを引き出すためである。

「しまった!!!」

悟空はなんとか食い止めようとしたが、時すでに遅し。その都はあっという間に荒野へと姿を変えた。

「貴様ツ… はあっ!!!」

シユウウウウウウウ…

ブーン…

金色に輝く髪、強靱な肉体を照らすオーラ。悟空はフリーザを圧倒した伝説の戦士・超サイヤ人に変異した。

「ようやく本気を出したな。なら、この俺も本気を出すでしょうか…！」

シユウウウウウウウ…

ドンツ

フリジットの気も最高潮まで高まった。殺気を隠していたフリジットからも殺気が溢れ満ちていた。

「これ以上地球や皆に手出しはさせねえ！」

ドンッ

悟空は地面を思い切り蹴りフリジットに突撃した。

バツ

ドギョッ

「だりゃー!!!」

バキッ

「なんだと!?!」

悟空の猪突猛進ぶりに怯むフリジット。悟空はそんなフリジットの僅かな隙を突いた。

「貰った!」

バシユッ

悟空がフリジットに一撃を重い浴びせた。しかし、その瞬間…

「はあっ!!!」

キュピッ

「な、何?!」

宇宙船から、別の仲間が飛び出し、悟空目掛けて縄を放った。悟空は抵抗する間も無く、呆気なく縄で捉えられた。すると、至近距離で構えていたフリジットが紫色に光り輝く液体を詰め込んだ注射器のようなもので悟空の体を正面から突き刺した。

グサッ

「あ… あっ…」

悟空は一瞬にして気絶してしまった。フリジットは再びニヤリと笑みを浮かべた。

「フッフッフツ… 野蛮なサイヤ人、戦って解決するなどという可能性の一部でしかない愚かな打開策で物事を進めるなど、考慮すべきではなかったのだ。」

「やったなフリジット。まずは1匹目か…」

「すまんがカイス、孫悟空を宇宙船の中に縛りつけておいてくれ。」

フリジットの部下(?)であるカイスが、孫悟空を担ぎ運び出した。

「後はベジータだけだ… 奴も捉えて2人まとめてこの手で引導を渡

し、サイヤ人の歴史に終止符を打つのだ……！」

悟空を仕留めたフリジットが次に目をつけたのはベジータ……サイヤ人復讐計画・フリジット軍の侵攻が始まるうとしていた。

一方その頃、孫悟空の行方を知らずに困惑している悟飯と悟天は……

「父さん、一体どうしたんだろう……急に急ぎの用事が出来たつて……」

「僕たちになんか隠し事でもしてるのかな？」

悟飯も悟天も真相を掴めないままだった。

「それに、父さんは絶対についてくるなって言っていた……これは、嫌な予感がする。」

悟空な言葉から、色々と察し始めた悟飯はカプセルコーポレーションに悟天と2人で赴き、ブルマ達に事情を説明した。

「え？孫くんがいきなり？」

カプセルコーポレーションでは、バーベキューの最中だった。

（チツ、何故悟飯と悟天のヤロウにも肉を分けるんだ……俺の分が減ってしまうだろう……！）

ベジータが小腹を空かせてウズウズしている中、悟飯と悟天は父親の行動を具体的にブルマに説明していた。

「なるほどね……孫くんが急にそんなこと言うなんて、よっほどのことが……でも、一度家に帰って様子を見てみれば？そのうち帰ってくるかもしれないし。」

「わかりました……もしここに現れたら、家に帰るように伝えてくれないませんか？」

「わかったわ。」

現段階では、行動の意図が掴めないために、悟飯と悟天一度家に帰り様子を見ることにした。

「帰る前に、沢山お肉あるから食べて行きなさい。チチさんには連絡を入れておくから。」

「やったー！」

「チツ」

ベジータの腹は鳴るばかり…。今起こっている出来事をまだ知る  
余地もない悟飯達、果たして悟空の行動の真相を掴めるのだろうか。  
か…。そして、帝王の弟・フリジットを倒す事は出来るのか…。？



## 2話 「願い玉を求めて 新・帝王の悲願」

孫悟空を仕留め、宇宙船の中に戻るフリジット達。しかし、フリジットの憤りはこんなものでは収まらなかった。

「やりましたね…。フリジット様。魔人ブウを倒したサイヤ人をも最も簡単に…。」

「やかましいー！これはまだ計画の第一段階にすぎん。誰が来てようが関係ない！」

サイヤ人を絶滅させる為に地球へやってきたフリジットは、たった1人サイヤ人を仕留めた程度では満足しない。次なる標的に向けての準備は怠らなかった。

「しかしフリジットよ、この地球にはドラゴンボールというどんな願いでさえも叶うと言われる願い玉も存在するらしい。先程のように一心不乱に街を破壊するようでは、その玉も無くなってしまいかもしれん。」

先程孫悟空との戦いに助太刀したカイスは、フリジット軍でも高い戦闘力と知力を持ち、フリジットからの信頼も厚い。

「ドラゴンボール…。そういえば、フリーザが孫悟空と戦ったのは、そのドラゴンボールのあるナメック星みたいだが…。何故その願い玉が、地球にも存在しているのだ？」

「かつて地球に移住したナメック星人がこの地球の神となり、ドラゴンボールを創り上げたかららしい。一度神は変わっているみたいだが、今でも訳なくドラゴンボールを使用することができるみたいだ。」

その話を聞いたフリジットは、ドラゴンボールの使い道を考えた。フリジットにとって、叶えたい願いはあまりに多かったのだが…。

「まあいい、今はサイヤ人を絶滅させることが最優先だ。それに、他のサイヤ人共がドラゴンボールについて詳しく知っているかもしれないからな。あの世に送る前に白状させてやる。」

フリジットの計画はサイヤ人の絶滅とドラゴンボール集めの同時進行で進めていく方針で固まった。兵士の数はわずかに100兵。フリジットは1人も失うわけにはいかないと考え、宇宙船で再び離陸

を行い、上空での移動を試みた。

「サイヤ人共、明日には貴様らの見る景色を地獄に変えてやる…！」

「フリジット、随分やる気だな。」

「当然だ…フリーザがいない、そしてサイヤ人もいなくなれば、我が軍を脅かす者は誰一人として存在しなくなるのだからな。」

フリジットが打倒・サイヤ人に燃えている中、つい先程フリジットが破壊した『東の都』の様子が全世界で報道された。ブルマ達にも、その様子が伝わったようだ。

「みんな！東の都の方で、事件があつたみたいだわ。」

カプセルコーポレーションと共にバーベキューを楽しんでいた悟飯と悟天も、その情報を耳にした。

「東の都と言ったら、数年前から復興が始まって、今ではだいぶ元通りの姿に戻ってきたって言う…。」

「そう、十年前くらいにサイヤ人が壊滅させたって言う東の都よ。」

「その東の都つてのを壊滅させたのはナツパのヤロウだな。俺たちが地球に攻めた時一番最初に降り立ったのは、その都だったということだな…。」

ベジータがナツパと共に初めて地球にやってきたエイジ762。ナツパのド派手な挨拶により、東の都は一度壊滅した。それから暫く経ち魔人ブウが襲来する前から復興が始まっていたが、フリジットに再び東の都は壊滅させられたというのだ。

「東の都は、復興が開始してから人口が急増していたのだけれど…。」

「隕石にしてはかなり大規模だ、この破壊は人口的なものだろう。だが、それが出来るほどの気を感じない…今は力を隠しているか、あるいは既に地球から立ち去ったかのどちらかだろうな。」

「東の都つてことは、パオズ山とも距離は近い！急いで戻るぞ！悟天！」

「う、うん！」

ありとあらゆる情報が入り混じる中、東の都で事件が起こったことを冷静に振り返った悟飯は、悟天と共に急いでパオズ山に戻ることにした。

「それじゃあ、また！」

「うん、気をつけて。」

悟飯と悟天はパオズ山へと戻っていった。すると、ベジータが口を開く。

「ブルマ、もしあの破壊騒動が異星人によるものだとしたら、そいつらがドラゴンボールを求めて来ている可能性は高いはずだ。今のままドラゴンボールを見つかる可能性はほぼないだろう…。だが、ドラゴンレーダーの存在が知れてしまっってはまずいかもしれん。ドラゴンレーダーはすぐに確保しておけ。」

「そうね、異星人かどうかはまだ分からないけど、あれほど大規模な破壊を起こせるほどのパワーの持ち主なら、ドラゴンボールが狙われても不思議じゃないわ。」

ベジータは、東の都を壊滅させる程の猛者は、ドラゴンボールを狙っていても不思議じゃないと考え、世界中に散らばったドラゴンボールを簡単に探し出せる機械・ドラゴンレーダーの確保をブルマに命じた。ブルマはすぐに家で保管していたドラゴンレーダーを、自分のポケットに仕舞い込んだ。

その頃、悟飯と悟天はパオズ山に向けて舞空術で帰る最中だった。

「な、なんだ？あの宇宙船は…。」

すると、悟飯が上空に浮かぶ宇宙船を視認した。悟天は、宇宙船の大きさに驚くばかりだった。

「お、大きな宇宙船…。ん？何かが近づいてくる！」

「本当だ…。こ、この気は…。ま、まさか…。」

悟飯と悟天の前に颯爽と姿を現したのは、悟空をあつさり仕留めた新時代の帝王・フリジットだった。

「サイヤ人共、たった今この場で死体を残して逝け…。新たなる帝王・フリジットのお通りだ。」

### 3話 「帝王の誤算 大きな傷痕」

フリジットは、2つのサイヤ人の気を逃しはしなかった。だが、フリジットの次なる目当てはベジータ。悟空の時のような詮術は必要ないと考えていた。

(やけにフリーザに似ている。東の都を破壊したのは間違いなくこいつだ…)

「貴様は孫悟空の息子だな。父親はあつさりどと仕留めさせてもらったぞ。」

「なっ…!?!」

悟飯は即座にフリジットがフリーザの血縁であると察した。孫悟空をあつさり仕留めたという驚愕の事実を耳にしたが…

「貴様に父さんと戦って競り勝つほどの力は感じない。どんな手を使ったんだ…」

「戦う… 悪しき思想だ。醜いサイヤ人ならではの頓馬な発想でしかない。我々はサイヤ人を滅ぼす為にやって来たのだ。サイヤ人を滅ぼす為なら手段は選ばん!」

フリジットは、その発言とは裏腹に気を最大限まで高めた。孫悟飯相手ならば己の力で充分だと計算していたからだ。

「お兄ちゃん… こいつ、ブウに匹敵するぐらいのパワーだよ…!」  
「これがこいつのフルパワーか… 油断してると痛い目に合いそうだ…」

悟飯は、フルパワーのフリジットには自分と拮抗するほどのパワーさえ秘められていると感じた。しかし、それが分かっていた悟飯はフリジットの作戦の誤算に気づいた。

「悟天、お前は下がって俺の戦いをよく見ておくんだ。いいな!」

「え、お兄ちゃんひとりで大丈夫なの!?!」

「心配すんな、兄ちゃんに任せろ!」

悟飯は本気のフリジットを前にしても物怖じせず立ち向かう。

「超サイヤ人にはならないのかあ?」

「ふっ…」

悟飯はブウとの戦いの際に老界王神に潜在能力を引き出しでもらった為、超サイヤ人への変身が必要としない。

ビュッ

「行くぞ！サイヤ人！」

バギイ

「どうした！その程度か！」

バンッ

「なっ!?ぐわあああああ」

フリジットの渾身の拳の一撃を喰らってもビクともせずカウンターを仕掛ける悟飯。フリジットにはかなり重い一撃だった。

ガッ

ガガガガガガガ

「はあっ！」

バシッ

「馬鹿なっ!？」

悟飯の猛攻にフリジットは反撃出来ない。悟飯は更にフリジットに畳み掛ける。

「でありやあああああああ！」

ガンッ

「ぎやあああああああ！」

「はあああああああ！」

「凶に乗るなよ猿！」

バンッ

「くうっ… ていつ！」

ズドッ

「ぐわあああああああ！」

悟飯の猛攻撃にフリジットが怯み始めた。大きな隙を見せた瞬間、悟飯は必殺技の構えを取り始めた。

シュッ

「かあああああめええええええ…」

「何故だ… 孫悟空の息子如きに… 何故…」



トの仕事だ。今宵は見逃してやる…。だがな、次は今回のように行くと思うな…。！」

シュツ

そう言うときカイスはフリジットを連れすぐに立ち去った。気がつくときフリジットの宇宙船もいつの間にか姿を消していた。

「はあっ…。はあっ…。」

「お兄ちゃん大丈夫!?」

「悟天、大至急でカリン様から仙豆を貰ってくるんだ…。」

「うん！分かった！」

悟飯は不意を突かれたためかなりの重傷を負った。立ち上がることさえままならず、悟天に応急処置を頼むしかなかった。

「確かに僕は不意打ちをまともに喰らった。でも…。もう一人の仲間の攻撃はフリジットって奴の攻撃よりも遥かに重かった…。一体これはどういうことなんだ…。!?」

フリジットの攻撃より重いカイスの一撃をまともに喰らい疲労困憊になる悟飯。その一方で、宇宙船では即座にフリジットの治療が行われていた。

「我が軍で開発した最新式のメデイカルマシンなら、フリーザ軍で使用されていた従来の物よりも迅速な回復が見込めます。」

フリジット軍では、かつてフリーザ軍でも使用されていたメデイカルマシンよりも短時間のうちに傷を癒す最新式のメデイカルマシンを取り入れていた。

「やはり魔人ブウを倒した時に、界王神界での戦いのみをリサーチしたのは間違いだったな…。フリジットめ、もう少し真面目に鍛錬していれば、仕留められたかもしれんものを…。」

フリジット軍は、悟空たちがブウとの最終決戦の地である界王神界での戦いのみを研究していた為、悟空、ベジータ、ブウ以外の記録はほとんど無かった。その為、界王神界での戦いで一番高い戦闘力数値を出していた孫悟空に合わせるようにフリジットは特訓を続けていたのだ。

「ぎ…。サイヤ人…。今に見ている…。」

フリジットは心に大きな傷を負った。思わぬ強敵・孫悟飯を前にし瀕死の状態まで追い込まれたからだ。しかし悟飯は、フリジット軍最強の護衛・カイスに阻まれフリジットを倒すことは出来ずに、悟空を助け出す最大のチャンスも逃してしまった。